

# 田舎の農家がアグリツーリズムで金のなる木に

赤トンボとヒグラシ、そしてワラを焼く匂い——。過疎化に悩む地方は実は宝の山だった。

「田舎力」など多数のベストセラー本がある金丸弘美氏(食総合プロデューサー・総務省地域力創造アドバイザー)の最新刊「田舎の力が未来をつくる！」(合同出版)が、Amazon「地域開発部門」で1位になっている。

金丸氏はこれまで地元野

菜のブランド化や加工品の6次産業などをアドバイスしてきたが、今回はアグリツーリズムの可能性を指摘。アグリ(農業)とツーリズム(旅行)を組み合わせた言葉で、一般には民宿のイメージだろう。インバウンド(外国人旅行者)を増やそうとしている自治体職員も熱心な愛読者だ。

しかしまあ、田んぼと畑しかない田舎に外国人がそんなに興味を持つとは思え

ないが……。

「注目したいのは、私が何度も取材で訪れたイタリアです。イタリアには農村体験できるアグリツーリズムを営業する農家が2万682軒あり、主に長期滞在の家族連れが利用している。日本の農家民宿は2000軒ほどですから、10分の1しかありません。ただ、私が勧めているのは、民宿よりもっと簡便な、農家をリノベーションして泊まれるように

した簡素な施設です。食事の提供は朝食ぐらいにし、夜は地元のレストランを紹介する。その分、料金は安い。旅行客は昼は宿から紹介された牧場や畑で農業体験をし、また宿に戻ってくる。これなら点ではなく、面として地域全体の活性化につながります」(金丸氏)

日本には空き家問題があ



る。親の残した古家の再利用にも役立つ。

「農家民泊については、農水省が100億円ほどの予算を付けて後押ししています。訪日外国人客は2000万人を突破し、政府は2030年に6000万人を

目指すとしています。地方への需要は確実に高まります」(金丸氏)

高学歴、高収入の世帯ほどアグリツーリズムへの関心は高いという。